

## 校長講話

小学校の校長講話はむずかしい。小学校一年生から六年生までが聞いている。この六年の差というのはとても大きく、六年生ともなれば大人の話がわかる。しかし、一年生はまだ言葉の意味理解も十分でない。その子たち全てに同じ話をするということ自体、すでに難題である。

そうやって苦勞し、工夫し、なんとかわかるように講話をするのだ。しかしそれが批判された。しかも小学校3年生の子にだ。「校長先生は話は、自分で確かめたものではなく、納得できない」のような内容だ。担任も担任だ。にやにやしなから「校長先生、こんな日記がありましたよ」と見せに来た。

それ以来私は、校長講話をする時、その子を意識するようになった。50過ぎのおじさんが、10歳にもならない子どもの評価を意識するのだ。少し滑稽な話かもしれない。しかし、その子の言うように、自分自身がきちんと確認することは、情報の質と言う意味において重要なことだ。

何年か後に今度は中学校の校長と中学2年生として、その子と再会することとなった。むこうは校長講話を批判したことなどは、覚えてはいないと思う。しかし、こっちは忘れない。自分できちんと確かめ、ある時には実際に現場を確認し、話をするようにした。その子とは直接話すことはなかったが、いつも気にしていた。

3年生になり、進路で悩む生徒が多くなった。その子もその一人である。私は、家庭の環境だとか、どんなことに興味があり、どんな教科が得意だとか、知るようになった。そしてその子は立派に自分の道を切り開きその子は卒業して行った。卒業式の日、見送りをしていると、その子が始めて私に声をかけてきた。隣にはお母さんがいた。

「校長先生、いつもいい話をしてくれてありがとうございました」

私は、リベンジを果たしたが、それ以上にその子との出会いに感謝の思いが強くなりこみ上げてくるのであった。